

■校内体制による組織的な対応について(その2)

■ある事例(発達障がい疑われるB君が学級から出て行ってしまう事例)

小学校3年生のB君は通常の学級に在籍しています。B君は、発達検査の結果から、知的全般にはそれほど遅れないものの、認知面での偏りがありました。

2年生のときは、好きな教科と苦手な教科に対する取り組み態度に差が見られ、気が向かないときは仲の良い友達の所に行ってふざけてしまいました。しかし、教室から出て行くことはありませんでした。

3年生になると担任の先生同じでしたが、周りにはよく気が利く友達が多くいる学級でした。先生は2年生のときよりも増して一生懸命にB君にかかわりました。友達もあれこれとよくB君の面倒を見ました。

ところが、B君はしだいに「トイレに行く。」「保健室に行く。」「・・・と教室を出て行くようになり、最近では黙って教室からいなくなってしまうようになりました。



■対応例

1 課題を分析する。

- ① B君自身の課題
 - ・ 学級に所属感が持てず、自分の居場所を感じることができないのではないか。
 - ・ 発達検査の結果や授業中の様子から、認知面で一斉指導のみでは理解が難しいところがあるのではないか。
- ② 学級全体の課題
 - ・ みんながB君のことをよく面倒見てくれるが、それがかえってB君には負担が大きく、「ぼくは、いつも面倒見れるダメな子」と思わせてしまっているのではないか。
- ③ 担任の課題
 - ・ 「B君のことを何とかしなければ。」と焦るあまり、B君と学級全体の関係が見えなくなっているのではないか。

2 対応策を考える。

- ① B君が学級に所属感が持てるようにする。
 - ・ 授業者は、B君の認知の特性を踏まえ分かりやすい授業を工夫する。特に発問や板書はB君が頭の中でイメージしやすいようにする。必要があれば補助教材も準備する。
 - ・ B君には、まじめから全部を理解させようとせず、まずできそうなところを着実にできるようにさせ自信を持たせることを主眼とする。
 - ・ B君の長所を見つけ、それを学級や授業の中で生かせる場を意図的に設ける。
 - ・ B君自身が自分の長所に気づき、それをみんなのために生かそうとする意欲を育てる。
- ② 級友がB君の長所と克服点を正しく理解し、Give and Take 的な関係で接することができる。
- ③ 校内の人的資源を生かし組織を生かして対応する。
 - 《担任》B君が活躍できる授業改善や学級経営努める。
 - 《養護教諭・生徒指導主事》B君が教室に居れなくなったときの避難場所を用意する。
 - 《管理職、学年主任》B君が校内で活躍できる場を校内・学年の中で意図的に設定する。
 - 《全職員》B君ががんばっているところを見つけ評価し、担任に知らせる。
 - 《特別支援教育コーディネーター》
 - ・ 担任に相談しながら上記を例に、対応案を作成し校内委員会にかけて検討し、それを校内委員会で検証する(2週間に一度程度)。

※ 10月6日(土)午後1時からいわき明星大で、「発達障がいの理解と支援」についてフォーラムを実施します。参加は無料です。